

口永良部島の火山活動解説資料（令和7年8月）

福岡管区气象台
地域火山監視・警報センター
鹿児島地方气象台

口永良部島では、2025年4月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7月頃から減少した状態で経過しています。また、その他の観測データにも活動の高まりを示す特段の変化は認められません。

これらのことから、9月5日（期間外）11時00分に火口周辺警報を発表し、噴火警戒レベルを3（入山規制）から2（火口周辺規制）に引き下げました。

火山性地震は7月頃から減少した状態ですが、中長期的には地震活動は活発な状態です。火山活動は引き続き高まった状態で経過しており、火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生する可能性があります。

新岳火口及び古岳火口から概ね1kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石及び火砕流に警戒してください。また、西側は新岳火口から概ね2kmの範囲では、火砕流に警戒してください。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石が遠方まで風に流されて降るおそれがあるため注意してください。

地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないでください。

○ 活動概況

・地震や微動の発生状況（図1、図4②③、図5③、図6）

2025年4月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7月頃から減少した状態で経過しています。地震は次第に減少していますが、中長期的には地震活動は活発な状態です。

火山性地震は主に古岳火口付近で発生しており、新岳火口付近においても地震活動が継続しています。振幅の大きな火山性地震は発生していません。新岳西側山麓付近での火山性地震及び、火山性微動は観測されませんでした。

8月の火山性地震の月回数は75回（7月：144回）と前月に比べて減少しました。古岳火口付近の火山性地震は66回（7月：134回）、新岳火口付近の火山性地震は9回（7月：2回）でした。震源が求まった火山性地震は、古岳火口及び新岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

この火山活動解説資料は気象庁ホームページでも閲覧することができます。

https://www.data.jma.go.jp/vois/data/report/monthly_v-act_doc/monthly_vact.php

次回の火山活動解説資料（令和7年9月分）は令和7年10月8日に発表する予定です。

資料で用いる用語の解説については、「気象庁が噴火警報等で用いる用語集」を御覧ください。

<https://www.jma.go.jp/jma/kishou/now/kazan/kazanyougo/mokuji.html>

この資料は気象庁のほか、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所及び屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院発行の『数値地図50mメッシュ（標高）』及び『電子地形図（タイル）』を使用しています。

・噴煙など表面現象の状況（図2、図3、図4①、図5①）

新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上400m（7月：300m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした（7月：なし）。

26日に鹿児島県の協力により上空からの観測を実施しました。2024年10月の観測と比較して、新岳及び古岳の火口内やその周辺において、地熱域や噴煙の状況に特段の変化は認められませんでした。

19日から21日にかけて山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近及び古岳火口周辺において地熱域を引き続き確認しました。新岳火口からは火口縁上100m程度、古岳火口からは火口縁をわずかに超える程度の噴煙を確認しました。

・火山ガスの状況（図4④、図5②）

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した観測では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり20～70トンと少ない状態でした（7月：10～60トン）。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2024年8月以降は概ね少ない状態で経過しています。

・地殻変動の状況（図7、図8）

GNSS連続観測では、2023年6月下旬頃から同年10月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動が観測されていますが、その後更なる膨張を示す変化は認められていません。

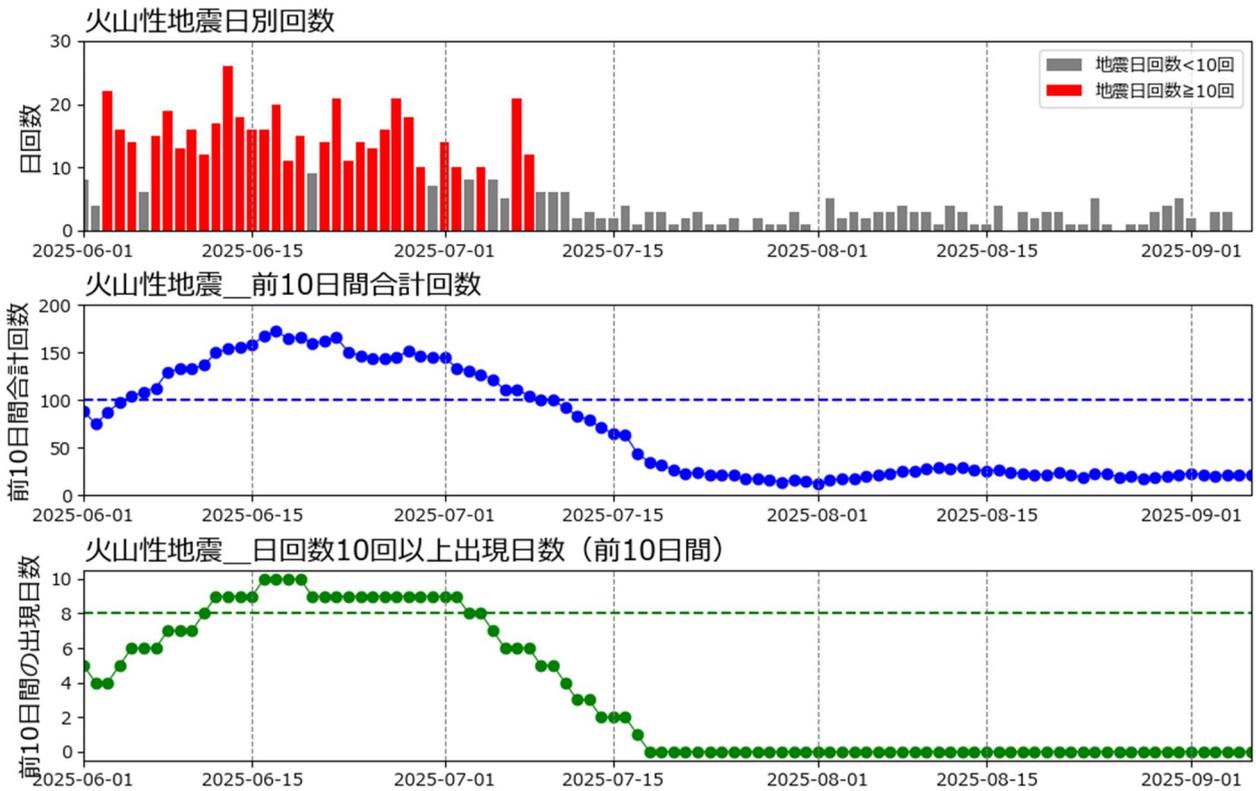


図1 口永良部島 【1段】火山性地震の日別回数、【2段】火山性地震の前10日間合計回数、【3段】火山性地震の日回数10回以上の出現日数（前10日間）（2025年6月1日～9月5日（期間外））

- ・2025年4月から山体の浅いところで地震活動が活発化し、火山性地震が多い状態でしたが、7月頃から減少した状態で経過しています。
- ・地震回数は減少していますが、中長期的には地震活動は活発な状態です。

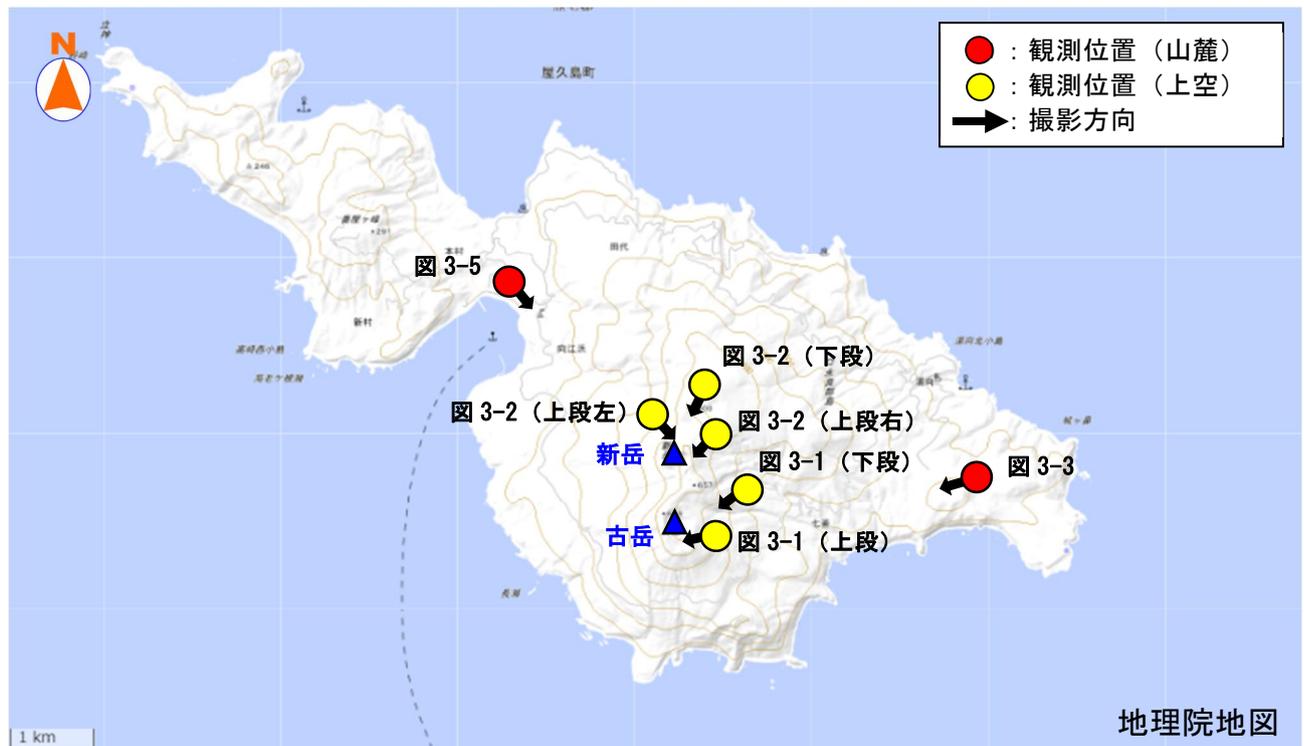


図2 口永良部島 観測位置及び撮影方向

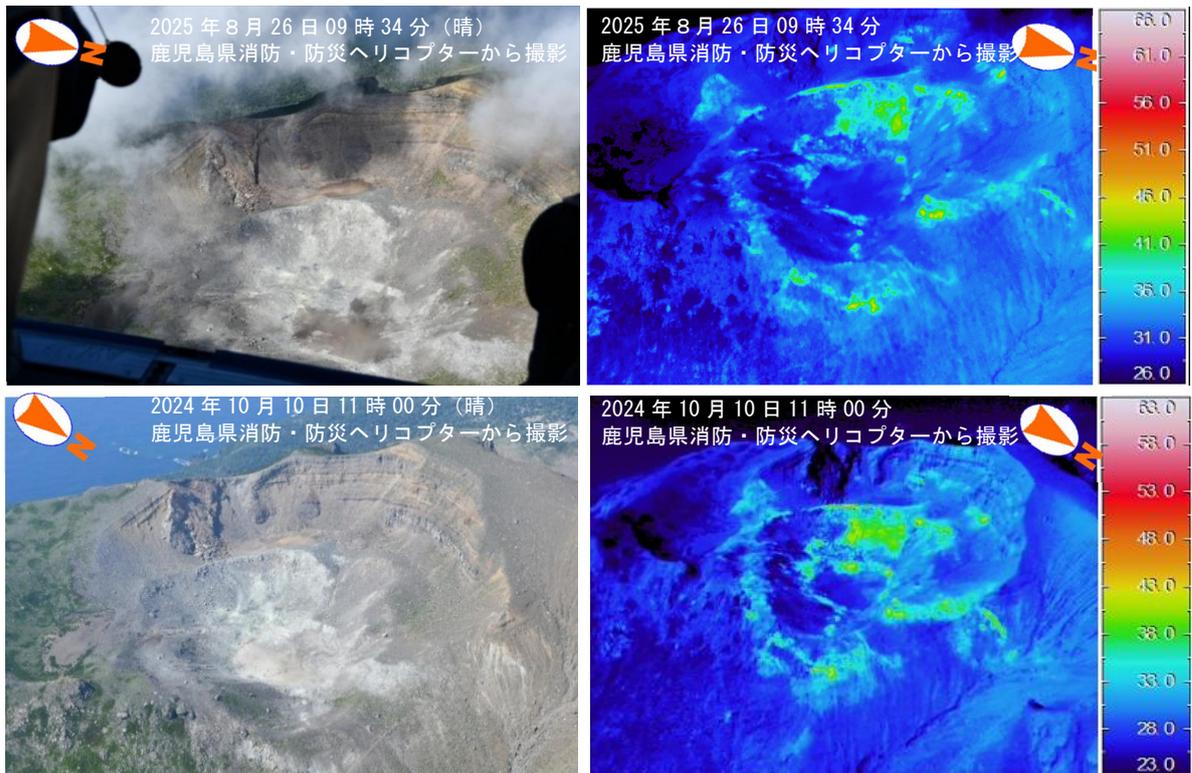


図 3-1 口永良部島 古岳火口及び周辺の状況（上空から観測）

- ・ 26日に鹿児島県の協力により上空から実施した観測では、2024年10月の観測と比較して、古岳火口とその周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。
- ・ 古岳火口内において白色の噴煙を確認しました。また、古岳火口内及びその周辺において地熱域を引き続き確認しました。

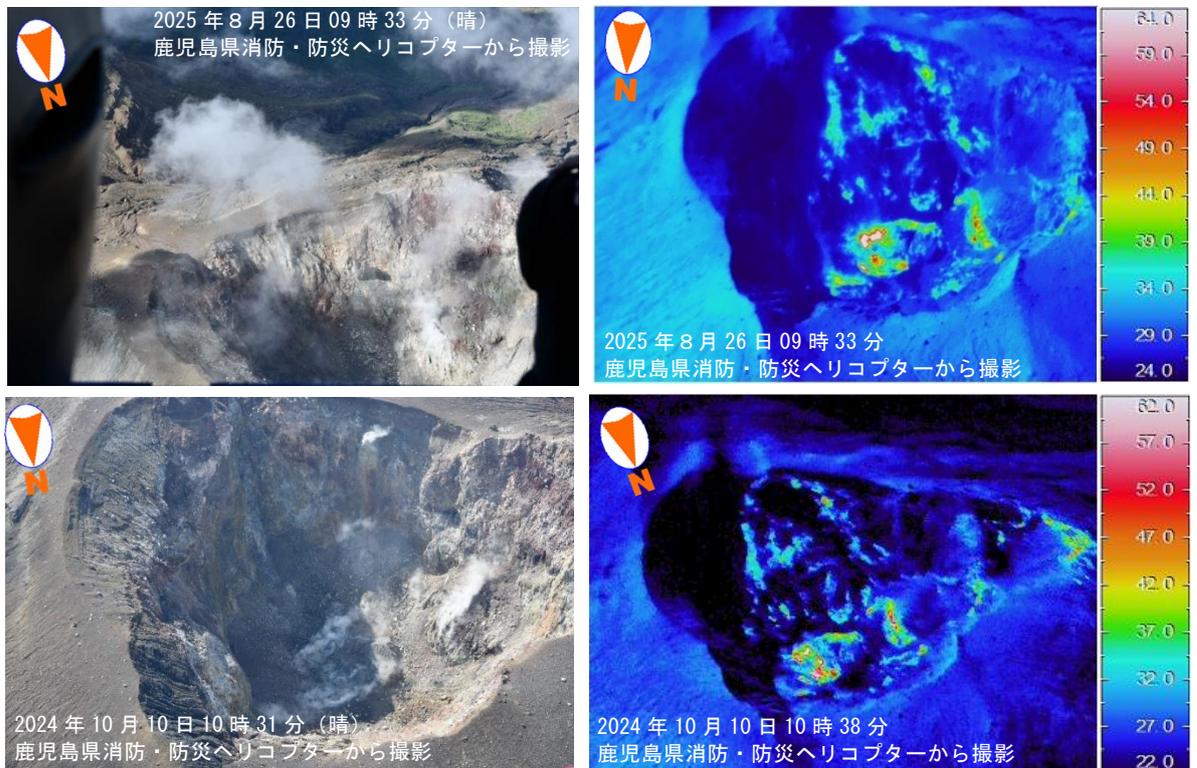


図 3-2 口永良部島 新岳火口内の状況（上空から観測）

- ・ 26日に鹿児島県の協力により上空から実施した観測では、2024年10月の観測と比較して、新岳火口とその周辺の状況に特段の変化は認められませんでした。
- ・ 新岳火口において火口縁を超える程度の白色の噴煙を確認しました。また、新岳火口内、西側割れ目付近及びその他周辺部において地熱域を引き続き確認しました。

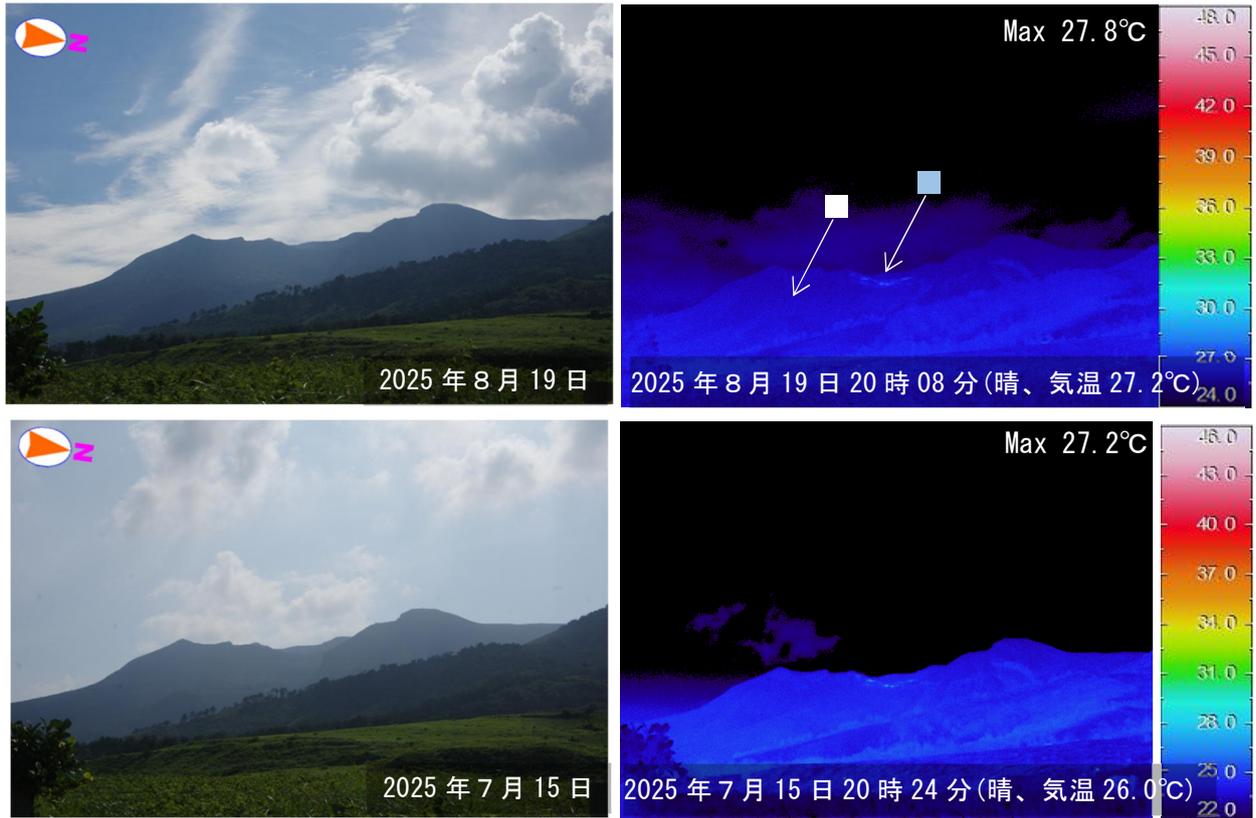


図 3-3 口永良部島 古岳周辺の地熱域の状況（湯向から観測）

19日から21日にかけて山麓から実施した現地調査では、古岳火口周辺において地熱域を引き続き確認しました。古岳火口からは火口縁をわずかに超える程度の噴煙を確認しました。

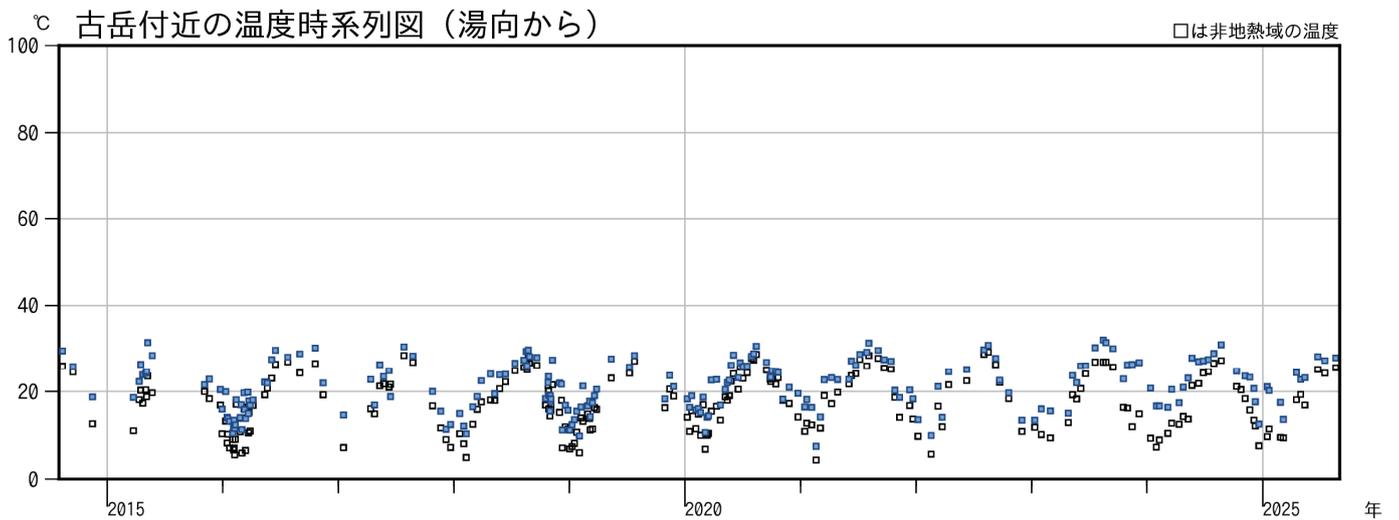


図 3-4 口永良部島 古岳火口付近の地熱域の温度時系列
（2014年9月～2025年9月5日（期間外）、湯向から観測）

古岳火口付近の地熱域の最高温度に変化は認められません。

各データは図 3-3 右上で示した領域の温度に対応しています。

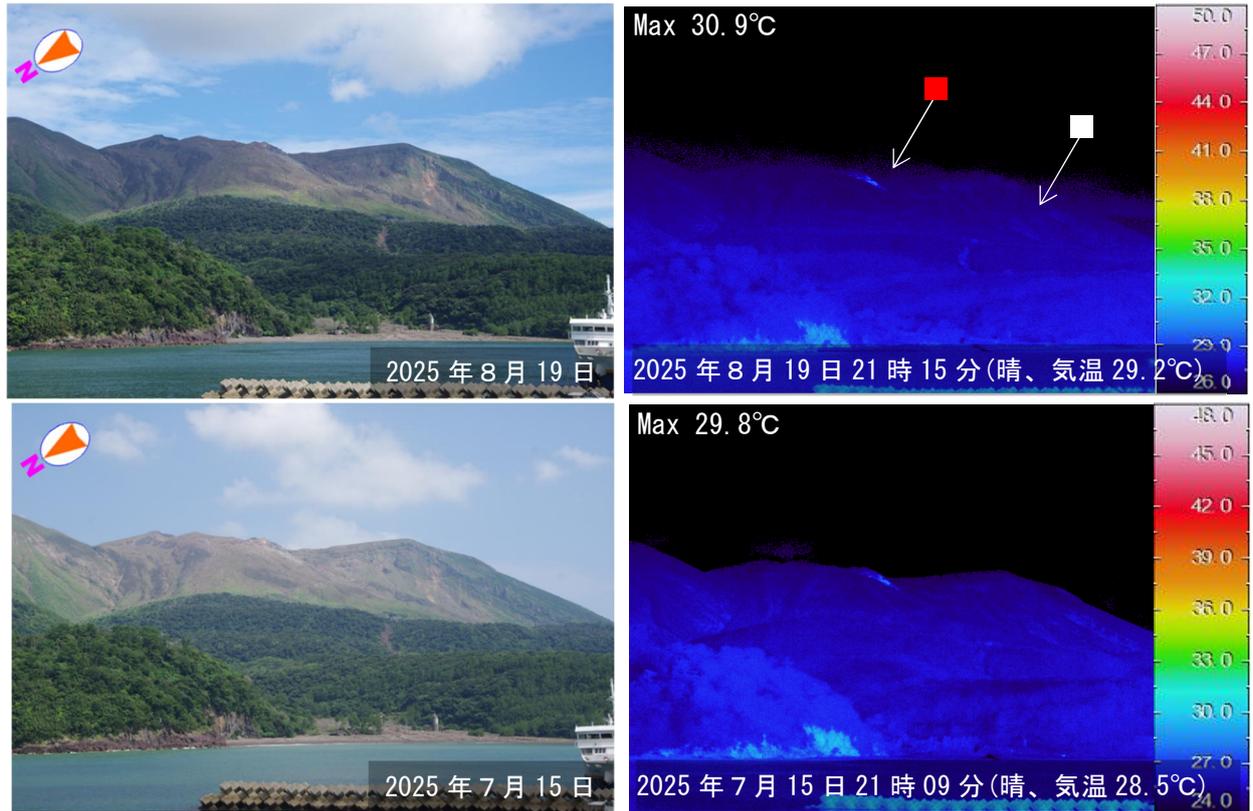


図 3-5 口永良部島 新岳火口及び新岳火口西側割れ目付近の状況（本村から観測）

19日から21日にかけて山麓から実施した現地調査では、新岳火口西側割れ目付近において地熱域を引き続き確認しました。新岳火口からは火口縁上100m程度まで上がる噴煙を確認しました。

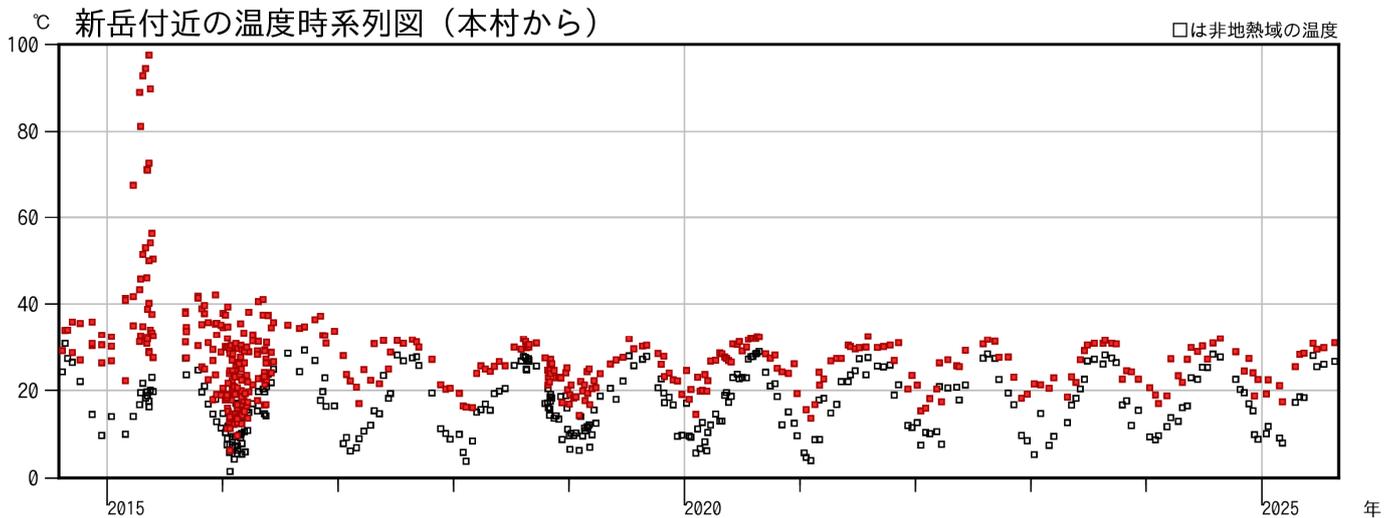


図 3-6 口永良部島 新岳火口西側割れ目付近の地熱域の温度時系列
（2014年9月～2025年9月5日（期間外）、本村から観測）

新岳火口西側割れ目付近の地熱域の最高温度に変化は認められません。

各データは図 3-5 右上で示した領域の温度に対応しています。

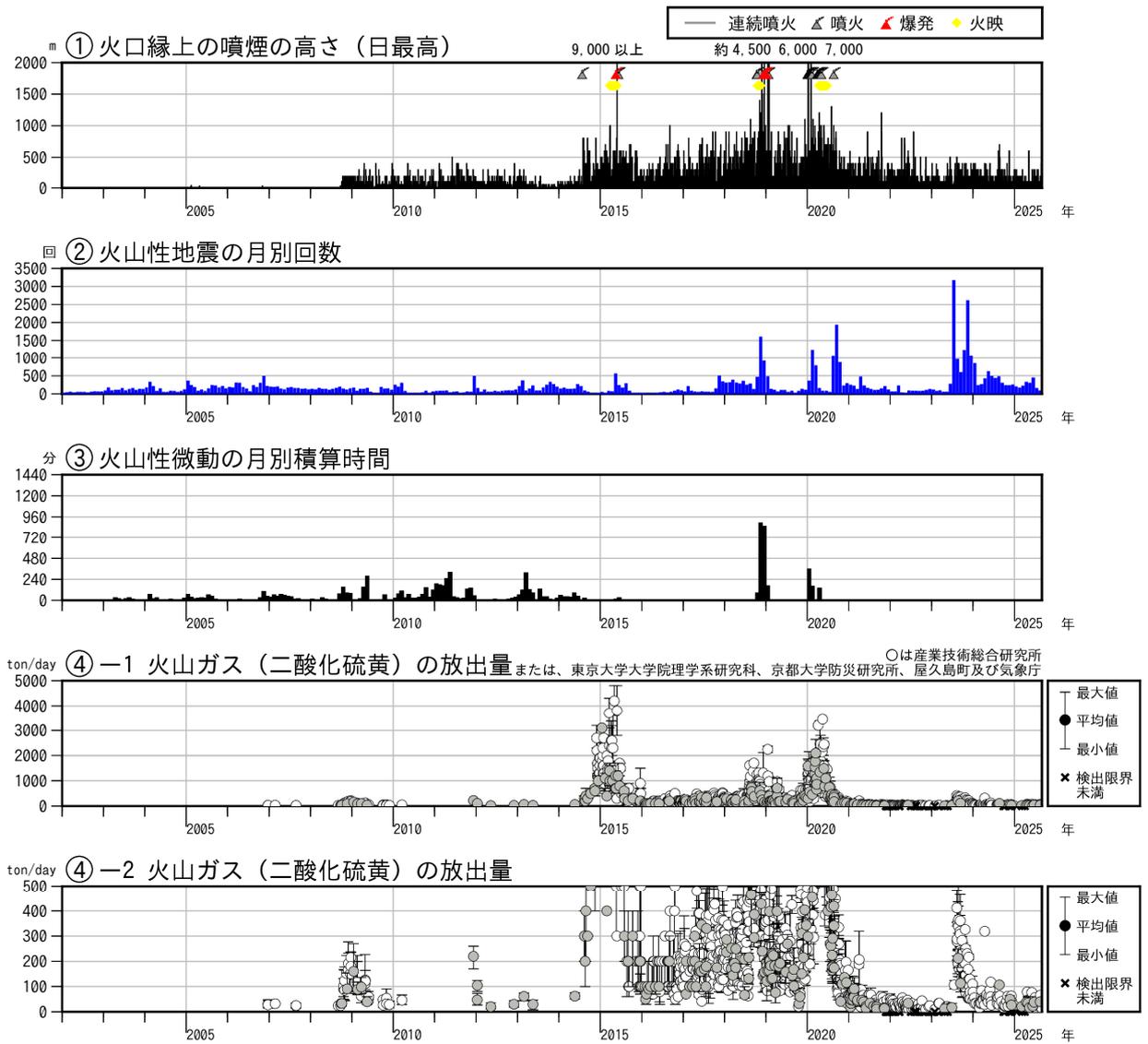


図4 口永良部島 火山活動経過図（2002年1月～2025年8月）

火山性地震及び火山性微動は、観測点の稼働状況により、「野池山3（上下動 $8.0\mu\text{m/s}$ ）」「FDKL（京）（上下動 $6.0\mu\text{m/s}$ ）」「新岳西山麓（上下動 $3.0\mu\text{m/s}$ ）」「新岳北東山麓（上下動 $1.0\mu\text{m/s}$ ）」「古岳北（上下動 $3.0\mu\text{m/s}$ ）」「古岳南山麓（上下動 $4.0\mu\text{m/s}$ ）」のいずれかの基準を満たすものを計数しています。
 2017年12月13日から2019年1月16日までは古岳北上下動成分の計数基準を $6.0\mu\text{m/s}$ としています。

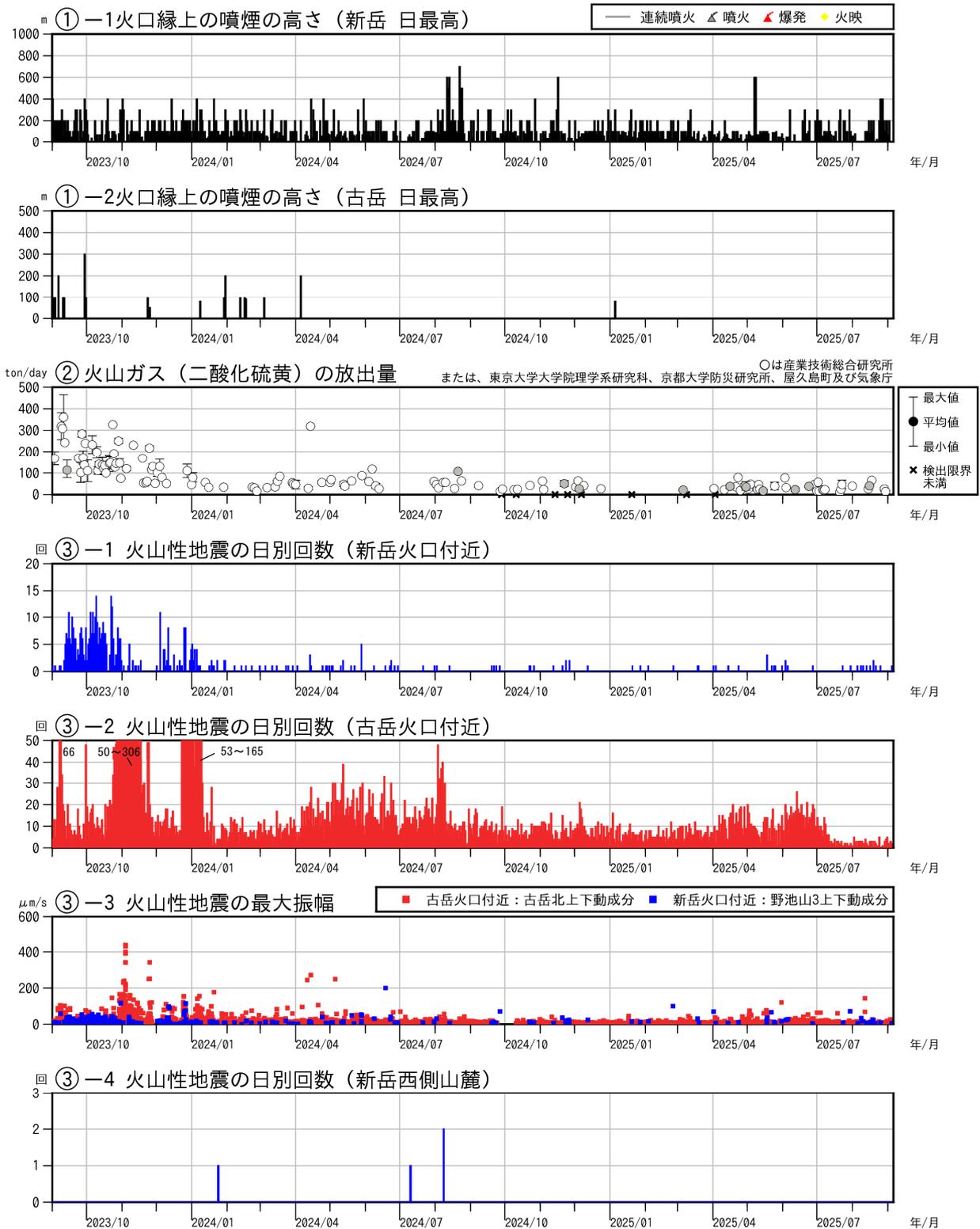


図5 口永良部島 最近の火山活動経過図（2023年9月～2025年9月5日（期間外））

＜8月の状況：9月5日（期間外）に噴火警戒レベル3から2に引き下げました＞

- ・新岳では、白色の噴煙が最高で火口縁上400m（7月：300m）まで上がりました。古岳では、監視カメラで火口縁を越える噴煙は観測されませんでした（7月：なし）。
- ・火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、1日あたり20～70トンと少ない状態でした（7月：10～60トン）。火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2024年8月以降は概ね少ない状態で経過しています。
- ・火山性地震の月回数は75回（7月：144回）と前月に比べて減少しました。古岳火口付近の火山性地震は66回（7月：134回）、新岳火口付近の火山性地震は9回（7月：2回）でした。新岳西側山麓付近の火山性地震は観測されませんでした。

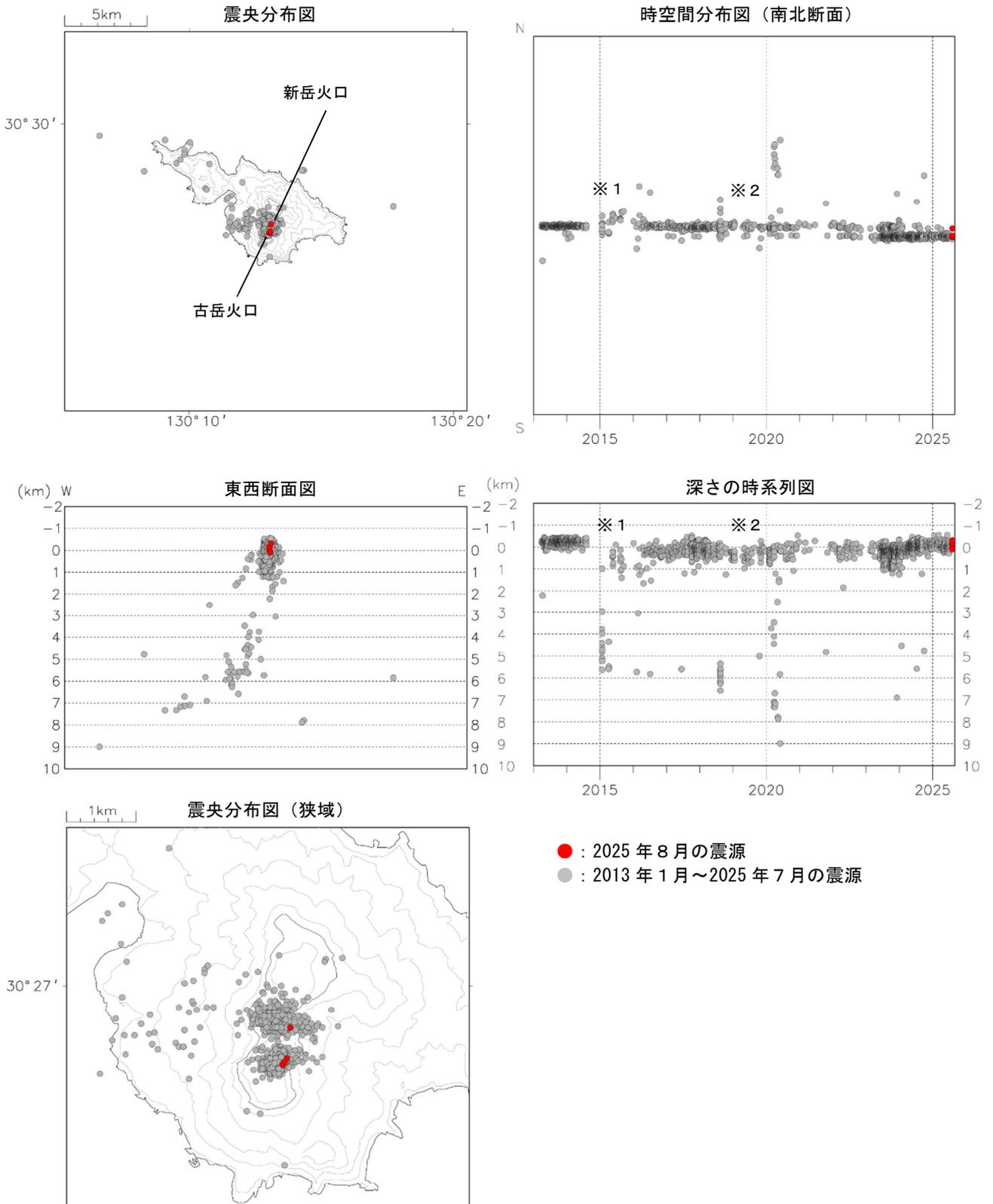


図6 口永良部島 震源分布図（2013年1月～2025年8月）

< 8月の状況 >

震源が求まった火山性地震は、古岳火口及び新岳火口付近のごく浅いところに分布しました。

- ※1 2014年8月3日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2016年5月31日まででは検知力や震源の精度が低下しています。
- ※2 2019年1月17日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、同噴火から2019年10月8日まででは検知力や震源の精度が低下しています。

その他の期間においても観測点の障害等により、検知力や震源の精度が低下する場合があります。

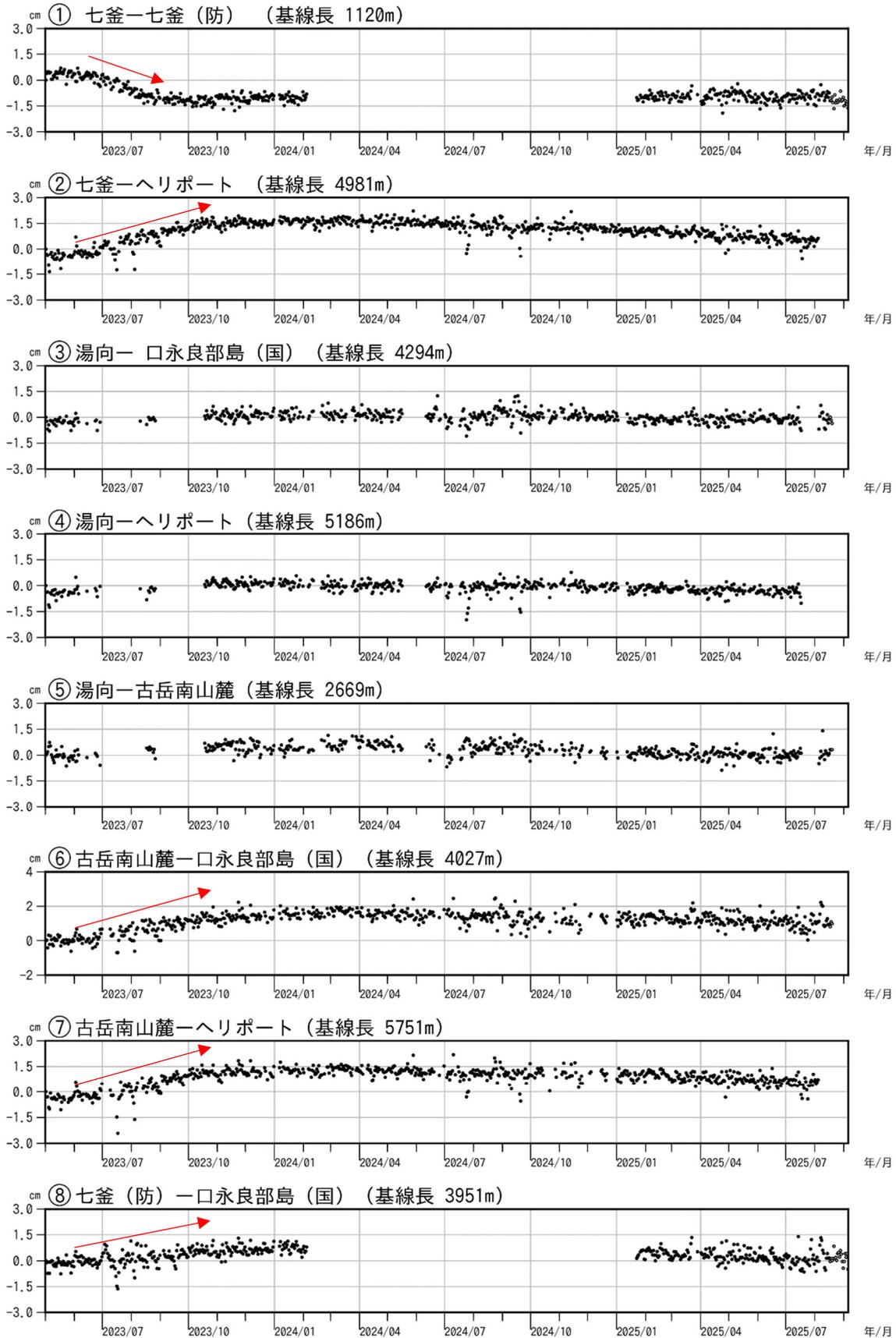


図 7-1 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2023 年 5 月～2025 年 9 月 5 日（期間外））

GNSS 連続観測では、2023 年 6 月下旬頃から同年 10 月頃にかけて古岳付近の膨張を示す変動（赤矢印）が観測されていますが、その後更なる膨張を示す変化は認められていません。

これらの基線は図 8 の①～⑧に対応しています。基線の空白部分は欠測を示しています。

(国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

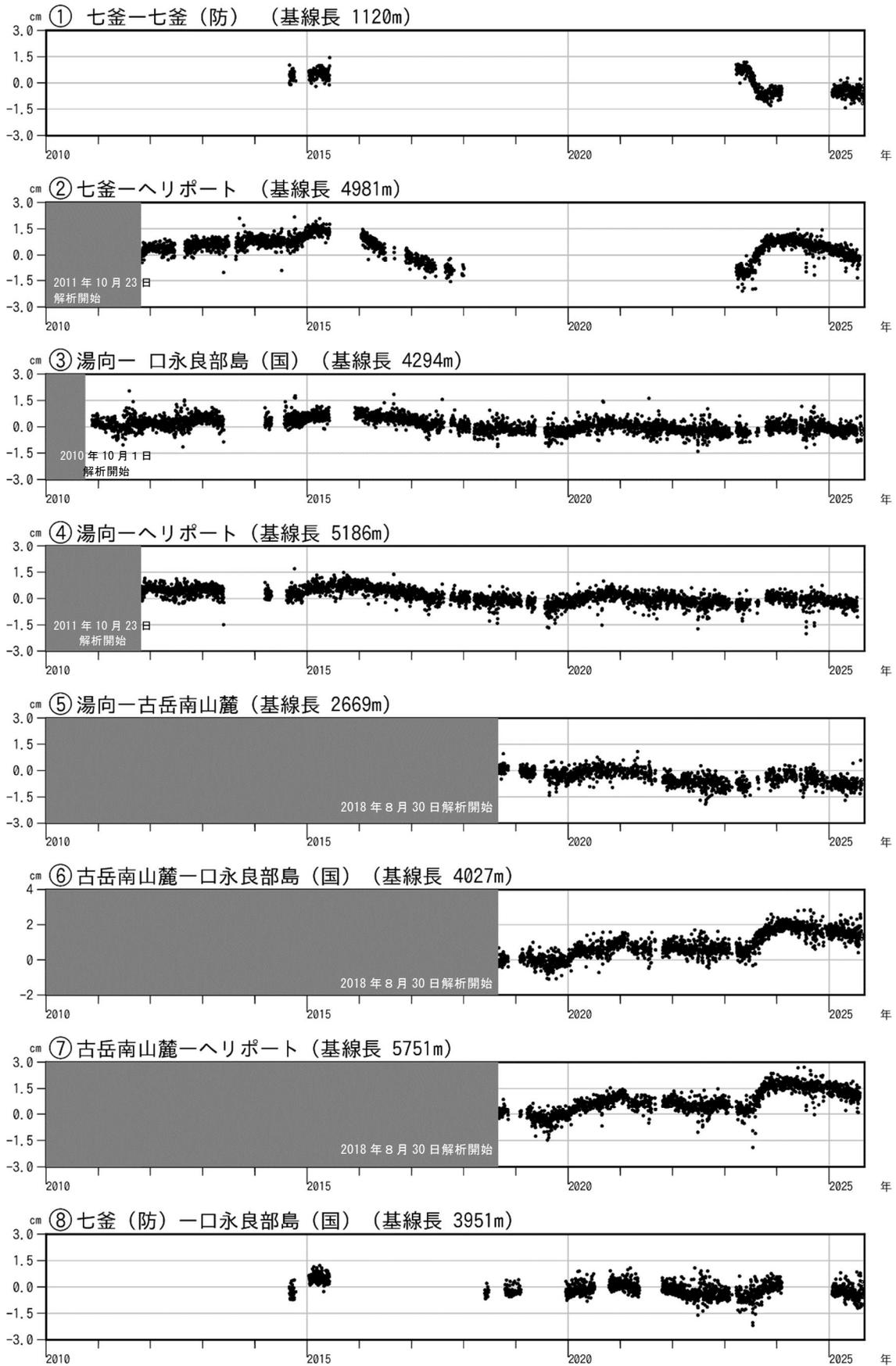


図 7-2 口永良部島 GNSS 連続観測による基線長変化（2010 年 1 月～2025 年 9 月 5 日（期間外））

これらの基線は図 8 の①～⑧に対応しています。
 基線の空白部分は欠測を示しています。
 2016 年 1 月以降のデータについては、解析方法を変更しています。
 2023 年 3 月 23 日の観測点修繕工事（七釜観測点）に伴うステップを補正しています。
 (国)：国土地理院、(防)：防災科学技術研究所

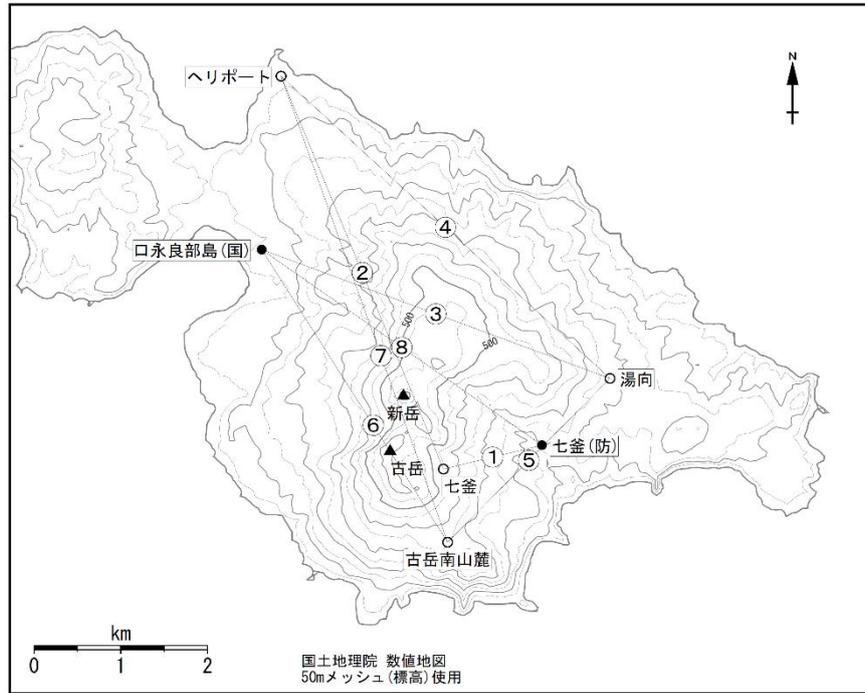


図8 口永良部島 GNSS連続観測点と基線番号

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(防): 防災科学技術研究所

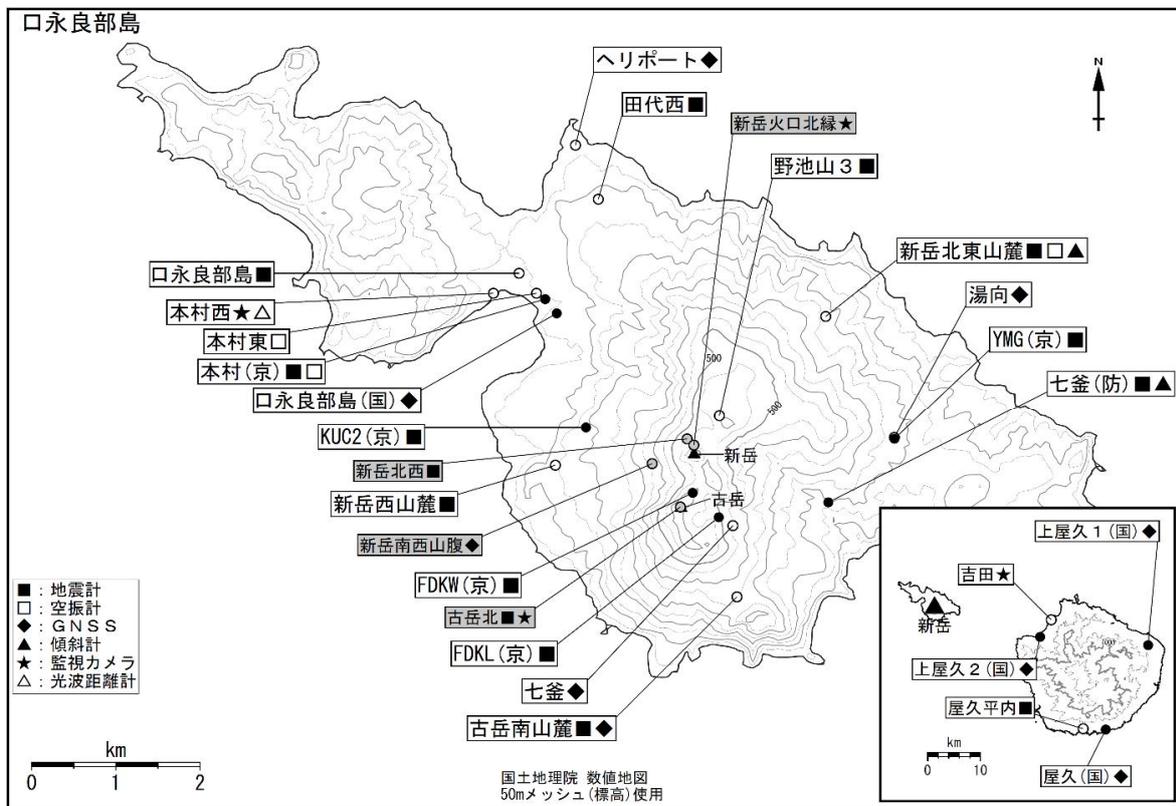


図9 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸(○)は気象庁、小さな黒丸(●)は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。

(国): 国土地理院、(京): 京都大学、(防): 防災科学技術研究所

図中の灰色の観測点名は、噴火等により長期障害となっている観測点を示しています。